

農作物技術情報 第5号 畑作物

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ **大豆** 開花期以降は、干ばつ時にはかん水を行いましょう。
また、ほ場の様子を確認し、病虫害防除を適切に行いましょう。
集中豪雨や台風に備え、明渠や排水溝等の点検整備を行いましょう。

- ◆ **小麦** 次期作に向け、排水対策等のほ場準備を開始しましょう。

大豆

1 生育概況

生育は全般的に順調です。一方で、7月下旬の降雨の影響により、一部のほ場では滞水が見られています。ほ場表面に滞水があると湿害の原因となりますので、排水を促します。

2 今後のほ場管理

(1) 開花期以降の水管理（高温・少雨対策）

ア 暗渠の閉栓

高温・少雨が予想されているため、大豆ほ場の土壌水分を適正に維持することを目的に、晴天が続く場合は暗渠を閉栓するなど、土壌水分の保持に努めてください。

イ うね間かん水

開花期以降は水分要求量が大きくなり、乾燥が続くと減収することもあります。下記URLに掲載している「大豆の開花期以降のかん水要否判定シート」を参考に、明渠やうね間を利用したかん水の実施について検討してください。

大豆の開花期以降のかん水要否判定シート

https://www.pref.iwate.jp/agri/_res/projects/project_agri/_page/_002/011/924/daizu_kansui_hannteisi-to.pdf

(ア) かん水実施の目安

- ・ 日中に上位葉が立ち、葉裏が目立つ。
- ・ 晴天が1週間程度続く。
- ・ 土壌表面が白く乾燥している。

(イ) かん水を実施出来る条件

- ・ 畦間通水ができる。（畦が立っている・滞水しない）
- ・ 漏水が小さい。
- ・ 排水溝が整備されている。

(ウ) 具体的な方法

- ・ 朝夕の涼しい時間帯に実施する。
- ・ 畦間に通水後は速やかに排水する。
- ・ 大区画ほ場では数日（概ね3日間程度）に分けて実施する。

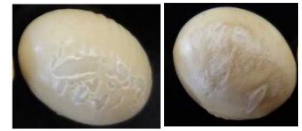


写真1 乾燥が続き、葉が立った様子
（ほ場全体が白っぽく見えている）

※地域によっては、農業用水の供給制限が行われているところがありますので、各地域の情報を確認してください。

【令和5年産大豆の障害粒（「英ずれ粒」等）の発生について】

令和5年産大豆では、不定形裂皮粒や英ずれ粒（リング状または帯状に淡褐色～褐色の着色及び皮切れが見られる粒）といった障害粒の発生が多く、県中南部を中心に発生が目立ちました。英ずれ粒の発生機構は解明されていませんが、主に子実肥大期の早い時期における高温・干ばつといった気象条件が影響していると考えられています。



裂皮粒
(不定形裂皮) 「英ずれ」粒

(2) 排水対策

集中豪雨による冠水・浸水被害や湿害を避けるため、畦溝と排水溝を連結するとともに、明渠や水尻にゴミなどの詰まりや崩れがないか確認します。また、排水口（フリードレン下部）の高さを確認し、ほ場内排水を促すようしっかり掘り下げてください。

3 病害虫防除

(1) ウコンノメイガ

ア 防除の目安

7月第6半旬に1茎あたりの葉巻が3個以上見られる場合は防除が必要です。8月5日頃までに薬剤防除を実施してください。

イ 発生の特徴

ウコンノメイガの成虫は葉の裏に産卵し、ふ化幼虫が葉を巻いて加害します。

ほ場をよく観察し、多発の徴候がみられたら、直ちに防除を行います。また、ウコンノメイガは、葉色の濃い品種や生育が旺盛なほ場で多発する傾向がありますので、重点的に観察してください。



写真2 ウコンノメイガ若齢幼虫による食害（葉巻）

(2) マメシンクイガ

ア 薬剤防除の適期（表1）

【県央、県南地域】

有機リン剤：9月第1半旬
合成ピレスロイド剤：8月第6半旬
ジアミド剤：8月第4半旬から第6半旬

【県北地域】

有機リン剤：8月第6半旬
合成ピレスロイド剤：8月第5半旬
ジアミド剤：8月第3半旬から第5半旬

イ 耕種的防除

連作を繰り返すと被害が多くなります。
水稲との輪作を実施して、発生密度の低減に努めてください。

ウ 発生の特徴

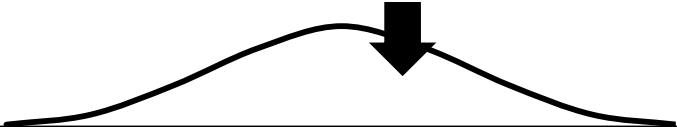
マメシンクイガは日長に反応して羽化するため、毎年同じ時期に発生します。

8～9月に羽化した成虫が、大豆の莢に1粒ずつ産卵し、ふ化幼虫が子実を食害して、収量・品質を低下させます。



写真3 マメシンクイガ幼虫による子実の食害

表1 各薬剤の最も防除効果が得られる時期（県央・県南地域）

系統名	8月						9月			
	半月	2	3	4	5	6	1	2	3	4
有機リン剤							◎	○		
合成ピレスロイド剤					○	◎	○			
ジアミド剤				◎	◎	◎	○			
マメシクイガ発生消長（北上） —：成虫 ↓：産卵盛期（推測）										

防除強化の評価 ◎：最も効果のある防除時期 ○：効果のある防除時期

※県北地域は、産卵盛期、防除適期ともに各々1半月早まります。

平成26年度岩手県農業研究センター試験研究成果書「大豆害虫マメシクイガに対する各薬剤の防除適期」より

（3）紫斑病

8月下旬以降で気温が20℃付近にあり、降雨が続いた場合に感染します。若莢期～子実肥大期に薬剤が莢によく付着するよう散布することが防除のポイントです。

ア 防除適期

- ・1回防除の場合：開花期から25～35日後の間
- ・2回防除の場合：若莢期（開花期20日後頃）～子実肥大期（開花期40日後頃）の間に2回散布（散布間隔は10日程度）

QoI 剤は防除効果の低下事例が報告されています。

使用する場合は、別な系統の薬剤との組み合わせの2回防除を実施してください。

イ マメシクイガとの同時防除の注意点

マメシクイガの防除時期は年次変動が比較的小さいのに対し、紫斑病の防除適期である若莢期～子実肥大期は、大豆の生育状況や天候などの影響で変動することがあります。このため、マメシクイガの防除適期と紫斑病の防除適期が重なるかを確認し、薬剤の特徴などを総合的に勘案した上で防除時期や薬剤などを決定してください。

ウ 耐性菌発生防止

QoI 剤、DMI 剤、ピリダジン類は、耐性菌の発生リスクが高いため、2～3年に1回の使用にとどめてください。



写真4 紫斑粒



写真5 紫斑病罹病株

小麦

1 令和8年産の振り返り

【令和8年産の特徴】

R8年産小麦は、播種時の長雨による湿害により生育不良になったほ場や播種できなかったほ場が見られました。

一方で、排水の良好なほ場は、例年より収量が高かった事例もありました。

【令和9年産への重点事項】

排水対策などの播種前のほ場準備を万全に行い、秋の天候に左右されないほ場を作りましょう。

2 小麦作付予定ほ場における水稻収穫後の管理

水稻後の小麦作では、連作ほ場とは異なり、作業期間の制約などから土壌改良資材や堆肥等の施用が難しくなります。長期的な土壌改良計画を策定し、ローテーションの中で土壌改良・地力向上に取り組んでください。

また、水稻収穫後、スムーズに播種が行えるよう、速やかに溝掘り（額縁明渠）等の排水対策を実施します。なお、連作ほ場あるいは固定転作ほ場でも排水対策は必須です。

(1) 排水対策の基本

明渠の施工を行うほか、確実に排水できるよう明渠と排水口を接続します。（図）

(2) 雑草対策

畦畔や明渠の雑草対策（非選択性除草剤の散布）を行い、ほ場内部への雑草の侵入を防ぎます。



写真6 排水口まで掘り下げ明渠と接続する

3 小麦連作ほ場のほ場準備

小麦連作ほ場では、水稻作付後のほ場に比べ、ほ場準備の期間を確保できるので、**万全な準備**を行います。

(1) 排水対策の実施

連作ほ場においても、コンバインやトラクタの走行によりほ場の排水性が低下していることがあります。明渠や弾丸暗渠を早めに行い、**乾きやすいほ場**を作ります。

(2) 雑草対策

連作ほ場では、イネ科雑草などの麦作における難防除雑草が発生することが多いです。**非選択性除草剤の散布**や**耕起**により雑草防除を行います。**耕起**を行う際は、ロータリー耕よりも**プラウ耕**の方が雑草種子を下層にすき込むことができるので効果的です。

(3) 土壌改良

一般に連作ほ場では連作年数に比例して地力が低下します。特に固定転作ほ場では石灰や苦土が減少し、低pH化が進んでいるほ場が目立ちます。**石灰資材などの投入**に加え、堆肥の投入や緑肥を利用するなど、**積極的な土づくり**を行います。

4 次年度に向けたかび毒汚染の防止・低減のために

(1) 品種の選択

本県の奨励品種から、赤かび病抵抗性が比較的強い品種を選択します。

(2) ほ場の選択

排水性の良いほ場を選択するほか、前作作物の影響を考慮します。

ア 赤かび病の感染源

赤かび病の伝染源は、土壌表面の作物残さに形成される「子のう殻」です。この「子のう殻」に詰まっている「孢子」が飛散して、麦類の穂に感染します。

赤かび病菌は幅広い作物残さから確認されますが、特にイネ科作物の「トウモロコシ、イネ、麦類」やイネ科雑草に多く寄生しています。

イ 残さの処理

・輪作

連作により発生リスクが高まりますので、麦類の連作を避け、水稻や他品目との輪作をします。

・残さの処理

前作の作物残さ（稲わらや稲株、こぼれ麦等）を早めに土壌中にすき込んだり、ほ場外へ持ち出して地表面に残さないことにより、赤かび病菌の密度を低下させます。

プラウ耕の実施（前作がトウモロコシでは必須）、またはアップカットロータリーや低速度の耕起を行い、確実なすき込みを実施します。



写真7 稲残さの地際部に形成された子うの殻



写真8 写真7の拡大図

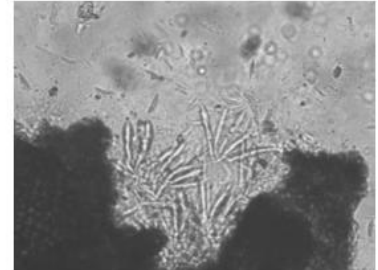


写真9 子うの殻内の子うのと子うの胞子

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。